

心の唄～希望へ by 琵琶法師

きたにまさみち（ギター弾き語り） & 芳沢憲明（シンセサイザー）
＜平成18年4月14日（金）18:30～ 新宿区立新宿文化センター小ホール＞

曲目紹介（★印の唄は、どうぞごいっしょに唄ってください）

- 涙そうそう：涙がぼろぼろとめどなく流れるさまを、沖縄では「涙（なだ）そうそう」と言うのだと、最近知った。森山良子は、小さい頃に亡くなった兄を想い、この詞を作った。
- ★朧月夜：この唄を唄うと、頭の中が黄色い菜の花で埋まってしまう。
- ★あざみの歌：ラジオ歌謡。素朴なあざみの花に、女性を重ねて唄っている。
- シクラメンのかほり：小椋佳は僕よりも少し上で銀行員だったが、自分で唄をつくり唄ってきた。この唄は、30年前、僕の青春時代の唄である。本当に、季節は知らん顔をして過ぎていく。
- 秋桜（コスモス）：明日、お嫁に行く娘と母が、小春日和の縁側でアルバムを開き、昔の思い出話をしている。さだまさしの名曲で、1977年に山口百恵が唄い、大ヒットした。
- ★知床旅情：1970年頃、大学構内で初めて加藤登紀子を見かけた。僕は、経済学部や看護学校の学生と合唱サークルをしていて、この唄をよく唄った。みんな、どうしてるかな。
- あなたの行く朝：加藤登紀子は、1972年に獄中の藤本敏夫氏と結婚した。彼女は、夫が自分よりも先に逝くことを予感し、その日のために、この唄を作った。
- ★百万本のバラ：1988年秋、ニューヨークにいた僕に、友人が加藤登紀子のコンサート切符をくれた。初めてカーネギーホールに入り、この唄を聞いた。いい唄だなあと思った。
- 昴：谷村新司は僕と同じ世代だが、いい歌をたくさんつくり、唄ってきた。昴は「天平の壺」という映画の主題歌。自分で唄うには少々気恥ずかしいが、良い唄だと思う。
- さくら（独唱）：桜三月。苦楽を共にした職員が異動で職場を去るとき、僕はいつも胸が一杯になった。障害物競走みたいな仕事をしてきたから、僕は楽しかったけれど職員は大変だった。いつの間にか時間が過ぎたね。長い間、ありがとう。友よまた、この場所で会おう。
- 群青：1981年、「連合艦隊」の主題歌。息子が戦死し、老いた父と息子の嫁と孫が海を訪れる場面でこの唄が流れる。60年前、様々な想いを胸に、かつての自分と同じような若者がたくさん死んでいった。後の世代に彼らが託したものを、僕たちは受け止めて生きてきたのかどうか。
- 無縁坂：信州上林温泉から30分、人里離れた地獄谷温泉の一軒宿の長女として、僕の母は生まれた。父に嫁ぎ、たくさん子どもを育てて15年前に亡くなった。宿をずっと守ってきた春枝おばさんもこの二月に亡くなり、お山がさびしくなった。二人とも、この唄が大好きだった。
- ★花～すべての人の心に花を：2001年7月、ご近所に「ひなたぼっこ」という宅老所ができて、僕は唄を唄わせてもらうようになった。一緒に唄ってくださる方は、時と共に変わってしまうけれど、最初と最後にこの唄をみんなで唄うところは、いつも変わらない。
- アメージング・グレース：黒人霊歌。「自分のような、どうしようもないろくでなしを、あなたは救ってくれた」。昨秋、日本のまちにも、この歌があふれた。
- ★故郷：平塚には山があり水があり、田んぼも原っぱもあった。小さい頃は土筆を摘んだりイナゴを取ったり、魚とりに行ったりした。数十年の間に、自然も人のつながりも、大切なものが次々に失くなってしまった。地震、地球環境、人間そのもの…信じがたいような問題が山ほどある。でも、まだまだ捨てたものじゃない、立て直すことができる、今が大事だと思う。もし地震で平塚のまちが廃墟になったとしても、生きていたら避難所を回って「故郷」を唄おうと、僕は本気で考えている。希望に向かって、もう一度歩き出そうよ。（きたにまさみち）

走馬灯

きたにまさみち

■ 1993年4月

役所人間だった僕が、地元で初めてかかわったのは今から13年前、45歳のときだった。

小学校時代の「決闘相手」の山口伸に電話で説教されたのがきっかけである。

「木谷、俺たちはもう少し、地元に関心を持たなくてはいけないんじゃないかな？」

「お前にだけは、そういうことを言われたくない！」

小さな市民活動グループができ、僕はおずおずと参加した。

■ 1994年9月

翌年、平塚で「防災フォーラム」を開いた。当時、僕は都の調査研究室で東京直下地震に取り組んでいた。4か月後の1995年1月17日、阪神淡路大震災が起き、6,433人の方が亡くなった。僕は、「神戸が身代わりになってくれた」と感じた。地元で一緒に活動していた青木さんは、「私たちがやったことは間違っていないのね」と言い残して、地震の数日後に亡くなった。

■ 1995年12月

僕は新宿西清掃事務所に異動し、翌年6月、事業系ごみ有料化に取り組む中で、早稲田商店会長の安井潤一郎さんや連合会書記の桜井一郎さんなど、早稲田大学周辺商店連合会の方々に出会った。

■ 1996年8月

学生がいない夏枯れの早稲田のまちで、環境がテーマの「エコサマーフェスティバル in 早稲田」が開催された。後に日本のNPOの大動脈に発展する早稲田のまちづくり運動の始まりである。

「何か新しいことを」と、商店街のホームページをつくることになった。僕には技術がないので思案していたら、たまたま早稲田にオフィスがあるトーコロ情報処理センターの横内康行さんを思い出した。二つ返事で横内さんは引き受けてくれて、見事なホームページが、横内さんと、重い障害を持つ目賀田さんたちの手でできあがった。RE-NETというメール会議室(ML)も始まった。

最初は、外からの応援でやっと開催できたお祭だったが、じきに、まちが動き出した。

寄本先生、藤田さん、清水さん、桜井さん、北上さん、金子さん、伊藤君、藤村さん、山本さん・・・ネットワークが広がりだした。

安井さんと僕はこんな会話をした。

「木谷さんたち(行政)は、俺たち(まち場)をずっと動かそうとしてきたでしょ？」

「そうだね」

「でも、俺たち動かなかつてしょう？」

「そうだなあ(苦笑)」

「でも、俺たちが動き出したら、誰も止められないよね？」

「ほんとにそうだね(深い感慨)」

まち場の人たちとの出会いにより、僕の頭の中の行政主導主義が薄らいでいった。

そもそも役所は人間がつくった道具であり、地域、つまり社会そのものが主であるという、当たり前前に僕には気がつき始めた。

■ 1996年11月

ある朝、僕は横内さんといっしょに早稲田大学の構内にいた。ごみゼロ平常時実験というイベントの真っ最中だった。すると、ハンサムな学生が電動車椅子に乗ってやってきた。

「おーい、乙武くん」と横内さんが声をかけ、僕を紹介してくれた。彼には手足がなかったから、僕はどこを見て話をしたらよいのかが分からず、どぎまぎした。気を取り直して、こう言った。

「乙武さん、僕たちといっしょに地域活動をやってみないか？」

「はい、やらせていただきます」

こうして、乙武洋匡さんが僕たちの仲間になった。

12月25日のクリスマスの夜、早稲田商店会の主催で、安井さん、横内さん、新宿区リサイクル推進課長の楠見恵子さんらが戸塚第一小学校で「親子の環境学習講座」を開いた。

トリが乙武さんで、これが初めての講演だった。
ユーモアのある、さわやかな語りに、みんなが魅了され、バリアフリーがストンと胸に落ちた。

「乙武さん、メールをやってみないか？」

「はい、やってみます」

翌年から彼は、器用にキーボードをたたき、メール会議室に参加してきた。

あるとき、安井さんが僕にこんなことを言った。

「木谷さん、俺たちは乙武を世に出すための前座だね」

「ほんとにそうだなあ」

98年秋に、ベストセラー「五体不満足」が生まれた。

「メールをやってなかったら、あの本は書けなかった」と彼は言う。

有名人になってからも、乙武さんは何かあるたびに、美しい手書きの葉書を送ってくれる。

■ 1997年7月

僕は異動で早稲田を離れることになり、稲毛屋に挨拶に行ったら、滋賀県立大学の柴田いづみ先生が訪ねてきて、初めてお会いした。この年のエコサマは柴田ゼミの学生が大活躍をした。

やがて、「エコサマ」は「地球感謝祭」と名前を変え、今では学生だけで何百人もが参加する大きなお祭になった。エコステーション、全国の修学旅行視察、震災疎開パッケージなど、早稲田のまちづくりはそのたびにマスコミを賑わして有名になり、小樽、熊本、沖縄など各地域につながりができて、全国ネットワークに発展していく。

90年代後半、日本の社会が行政主導から民間・地域主導に大きく変化し始めた時期である。

■ 1999年6月

僕は産業振興ビジョンというプロジェクトを担当することになった。有識者懇談会は作らず、インターネットでNPOや商店街の活性化事例を集めてホームページに掲載し、情報を共有しながら実際に活性化を進め、それをビジョンにまとめるという、変わったやり方を採用した。

早稲田に加えて、FUSION長池の富永一夫さん、葛飾若手産業人会の瀧澤一郎さん、ひさし総合教育研究所の渡部陽子先生、シニアSOHO三鷹の堀池さんなどたくさんのつながりができた。

若手職員はWAWAIというグループを作り、応援してくれた。遅れていた都庁ITにもようやく変化が出た。僕は職員に「からだ壊すな、家庭壊すな」と言いながら、無理ばかりさせていた。

■ 2001年4月

都にIT推進室が新設され、思いがけなく僕が担当することになった。以後、昨年7月までの4年間、僕は<電子都庁・電子都市>に関わることになる。山また山、障害物だらけであったが、職員が良くがんばって、原始都庁は電子都庁に変わり、電子自治体連携も進んだ。都庁のITは全国最下位からトップに変わり、東京のブロードバンドは世界最高レベルになった。

もちろん、ITが進み便利になることと人間が幸せになることの間には大きな距離がある。

本当に大事なものは、通信系でなく人間系であり、そこが大きな問題を抱えていることも事実だ。

IT推進室にはたくさんの思い出があるが、とても書ききれない。

■ 2001年7月

自宅から三分のところに、宅老所（民家を改修した小さなデイセンター）「ひなたぼっこ」ができた。代表の大見京子さんから頼まれて、翌月から唄を唄わせてもらうようになった。

民設民営で行政の補助金はゼロ（介護保険は役立っている）、24時間365日営業、通所者もワーカーも満足度が高い、ワーカー34人は有給で雇用が発生、住宅地の真ん中にある…夢見たいな施設だが、5年間に、同じような民間施設が平塚では12に増え、全国に広がっている。

「地域のでこんなことができる」という、コロンブスの卵みみたいな事例である。

ずっと避けていた福祉の世界に、僕は初めてかかわりを持った。お年寄りといっしょに唄っていると心が安らぎ、楽しい気持ちになる。唄は心を伝える媒体であると感じるようになった。やがて、唄う場所と回数が増え、僕の土日の地域活動のベースとなった。

■ 2002年8月

早稲田大学国際会議場で、東京いのちのポータルサイトという防災ネットワークが発足した。

早稲田や産業振興ビジョンなどのネットワークに加え、防災に取り組む個人や団体がたくさん参加した。いのちのポータルはその年の12月にNPO法人化し、安井さんが代表になった。

役員だけで40人を超す強力なネットワークである。東京e大学の瀧澤さん、東商中野支部の佐々木さん、東京コロニーの勝又さん、早稲田商店会の藤村さんなど民間メンバーに加え、国交省の澁谷さん、板橋区の鍵屋さん、中野区の小田さんなど行政関係者もすばらしい活躍をした。

三年間、いのちのポータルは被害軽減の切札である耐震補強に猛然と取り組んだ。行政の姿勢が変わり、マスコミの論調が変わり、国民の意識も変わってきた。かつては考えられなかったような変化が起きている。問題は、これを実際の被害軽減につなげられるかどうか？ 時間との闘いである。

■ 2003年7月

300万人が集まる七夕祭を借景に、全国市民活動まつり（NPO祭）が平塚で開催された。

8月には、いくつかの地域グループが核となり、ひらつか防災まちづくりの会が発足した。十年來の友人である篠原憲一さんが代表になり、防災講演、防災まち歩き、防災カルタ、多言語防災パンフレットなど多彩な活動が行われていく。平塚は防災まちづくりで全国一、有名なまちになった。

耐震補強も画期的な展開をした。福井義幸さんが、安価で効果の高い「耐震後付ブレース工法」を開発し、2004年3月には、地域のつながりの中で初めてモデル工事が実施された。

■ 2003年6月

佐世保で女子小学生が同級生を刺殺する事件が起きた。副知事の竹花豊さんから協力を依頼されたのだが、僕には手がなく知識も足りなかったから、NPOに協力をお願いすることにした。

6月25日に、ひさし総合教育研究所の渡部先生、FUSION長池の富永さん、東京いのちのポータルサイトの安井さんと僕の四人が連名で緊急フォーラムの開催を呼びかけた。

7月20日、都庁に100人を超す人が集まった。

10月には「ネット社会と子どもたち協議会」が設立され、渡部先生が代表になられた。人間の出会いの意味は、後になって分かることがあるから不思議だ。

■ 2004年10月

10月28日、中越大地震が起きた。12月26日、インド洋スマトラ沖でM9（阪神淡路の千倍）の地震が起き、巨大な津波が発生して全てを押し流した。

12月30日、同じ世代で兄弟同様に育ち、僕を含め彼を知るすべての人から信頼され、尊敬され、愛されていた加藤正夫さんが亡くなった。かけがえのない人を失ってしまった。

この頃、僕は横浜火種の会の方々に出会い、いつの間にか、方々で一緒に行動するようになった。かつての上司である童門冬二さんと産業振興ビジョンが取りもってくれた不思議なご縁である。

■ 2005年

2月に平塚耐震補強推進協議会が設立され、3月に緊急耐震補強フォーラムが開催された。4月にはNHKの「暮らしの中のニュース解説」で平塚の取組みが大きく報道され、難しかった耐震補強が進みだした。7月の「平塚七夕＝全国市民活動まつり」では、神奈川大学松岡ゼミの若者が地域通貨タナー発行などで大活躍し、11月には土屋の妙円寺で素敵なく寺子屋が開催された。

11月、ネット社会と子どもたち協議会の一周年記念フォーラムが都庁で開催された。12月には、いのちのポータルサイト主催の「耐震補強推進東京集会」が田町で開催され、構造計算書偽装問題もあいまって、耐震の世論が急速に盛り上がった。

■ 2006年

1月16日、NHK「クローズアップ現代」で墨田と平塚の耐震補強が報道された。2月には、墨田で耐震補強フォーラムが開催され、東京全体に波が広がり始めた。そして今日、たくさんの方々のご支援のもとに、僕たちは「心の唄～希望へ」というコンサートを開かせていただいている。

昨年8月、東京いのちのポータルサイトに「心の部会」ができて、芳沢憲明さんに出会った。やがて、彼の音楽の才能を知り、いっしょにコンサートを開きたいと思うようになった。

年長である僕のがままで、今日は思い出を書かせてもらったけれど、彼がいなければこのコンサートはありえなかった。好きなことをさせてくれているそれぞれの家族にも、心から感謝したい。

今日のコンサートを含めて、十余年の歳月のどこかを一緒に歩んでくださった皆さまに、もう一度心から感謝し、厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。